

## 信州大学農学部における 『土と緑の体験講座』に関する事例報告

東 孝明・齋藤 治・中村 篤・丸山 悟・畠中 洸  
杉山大地・岡部繭子・濱野光市・春日重光  
信州大学農学部附属アルプス圏フィールド科学研究センター

### 要 約

信州大学農学部の農業体験講座に参加した家族にアンケート調査を実施し、食育の視点から農作業の内容を検討するとともに、体験講座の持つ特色から食育への可能性について検討した。参加者は子供への教育、体験や家族で参加できることに期待を寄せて参加し、農作業の実践などに満足して講座を受講していた。参加者の多くが安心できる農産物、食の安全に対する意識が強く、体験講座は農業生産体験以外にも、農作物の生産から食に至るまでの過程を体験することにより、自身でよいものを選択する能力を培う場として活用できる可能性がある。また、農業の多面的機能による人間教育において、食育も含めた包括的な実践教育も期待して参加していた。農業体験講座は、これら農業のもつ多面的教育の実践する場として位置づけることが可能であると考えられた。

キーワード：土と緑の体験講座、アンケート、農業体験講座、食の安全、人間教育

### 緒 言

食をめぐる現状は、かつての食糧難の時代から飽食の時代を経て、現在では食の安全や安心を求める時代に遷り変わってきた。農業、農村の活力低下は、国内の最終飲食費が減少傾向にある中で、国内の農林水産業の帰属割合が低下していることも農林水産省のデータで試算されている<sup>1)</sup>。そのような現在、都市部の農業離れは基より、農村地区においても農業離れや農業の一端をも経験することのない世帯が多い。それらの家族や子供においては、食品の原材料の本来の形や生産、加工される過程に関する知識も乏しい。

農業情勢は転換期を迎え、平成22年3月には、新たな「食料・農業・農村基本計画」が策定され、「食」と「地域」の早急な再生を目的とし、食育の観点からも、平成23年度からの新たな第2次食育推進基本計画が策定され、「食料の生産から消費等に至るまでの様々な体験活動を行うとともに自ら食育のための推進活動を実践することにより、食に関する理解を深めること」を旨として生涯食育社会の構築を掲げている<sup>2)</sup>。

信州大学農学部附属アルプス圏フィールド科学教

受付日 2013年11月29日

受理日 2014年1月9日

育研究センター(AFC)では、現在を取り巻くこれらの環境も踏まえ、毎年小学生を持つ家族を対象とした「土と緑の体験講座」を開催し、地域の方々と交流を図っている。体験講座に参加した家族にアンケート調査を実施し、食育の視点から農作業の内容を検討するとともに、体験講座の持つ特色から食育への可能性について検討した。

### 材料および方法

信州大学農学部で行われている「土と緑の体験講座」の25年度のアンケート結果を集計した。「土と緑の体験講座」は、信州大学農学部附属施設係と附属農場アルプス圏フィールド科学教育研究センター(AFC)が主催する小学生の子供を持つ家族対象の講座であり、農作業、林作業、食品加工、自然観察を農学部構内の圃場と施設を利用し、体験学習として行っている。実施場所は、構内ステーション(南箕輪村)、野辺山ステーション(南牧村)、手良沢山ステーション(伊那市)で行い、各回とも約3時間で、参加費は、1家族2,000円で行っている。25年度の講座は11家族、44名の参加があった。

#### (1) 作業日程について

25年度のスケジュールは、5月から10月まで毎月約1回程度の開催とし、稲作、園芸、畜産、林業を組み合わせた講座であり、開催日に適期の農作業や

表1 25年度の「土と緑の体験講座」における作業日程

作業日程	作業内容	実施場所
5/25	田植え・おはぎ作り	構内S
6/29	田の草取り・田んぼの生物の観察・おにぎり作り	構内S
7/13	イチゴの収穫・ジャム作り	構内S
8/4	搾乳体験・バター作り・キャベツ収穫	野辺山S
9/28	稲刈り・餅つき・ボン菓子作り	構内S
10/12	ブドウ、リンゴの収穫・ジュース作り	構内S
10/26	枝打ち体験・豚汁作り	手良沢山S

※25年度10/26の作業は、悪天候により中止となった。

表3 体験講座の参加者成人における以前に農業経験の有無

	経験あり		経験なし	
	男	女	男	女
18年園芸講座	1	3	0	2
18年稲作講座	1	1	0	1
18年ソバ講座	3	3	1	1
20年稲作講座	0	1	1	2
20年花卉講座	0	2	2	1
20年ソバ講座	1	0	0	2
20年果樹講座	6	10	0	1
合計	12	20	4	10

管理、収穫作業と加工が計画されている(表1)。参加者は、全員で各々の開催日の講座内容を同時に実践した。21年度以前の体験講座は稲作、果樹、野菜、花き、ソバの講座にそれぞれ年間スケジュールを作成し、参加家族がいずれかの1講座を選択するカリキュラムであったが、現在の講座は、参加家族全員が農林業を包括し統一された講座の内容を受講する形式である。

## (2) アンケートについて

アンケートは、すべての講座終了後に実施した。

### ① 大人用アンケートの項目

- ・性別および年齢
- ・今までの農作業体験の有無
- ・体験講座に参加した理由
- ・体験講座の満足度
- ・体験講座の感想
- ・各回の講座の満足度と感想
- ・体験講座への意見、要望
- ・開催時期・時間・参加費に関する意見
- ・現在の農業に求めていること
- ・農業がもつ人間教育についての意見

### ② 子供用アンケート

- ・性別および年齢
- ・今までの農業体験の有無

表2 体験講座の参加者成人における以前に農業経験の有無

	経験あり		経験なし	
	男	女	男	女
成人	4	4	0	2
小学生	4	3	0	0

表4 体験講座の参加者成人における以前の農業経験(複数回答可)

	男	女
家が専業農家、兼業農家を行い作物を作っている	0	1
親戚、実家、知人等の農業の繁忙期に手伝う	1	2
家庭菜園など自宅でもかなう野菜等を作っている	3	2
体験学習などに参加したことがある	0	0
今までほとんど経験がない	0	2
合計	4	7

## 結 果

参加者の農業経験は、「経験無し」とする人は少なく、成人男女ともに「経験あり」の回答が多かった。参加した小学生は学校での授業や畑管理、体験学習、農家訪問等で経験があり、得られた回答では農業経験済みが100%であった(表2)。18年度、20年度に得られた同じ質問においても、体験講座に参加する以前に農業経験がある成人が農業未経験の成人の2倍以上であった<sup>3)</sup>(表3)。

講座に参加する以前の農業経験の内容は、「家庭菜園などの自宅でもかなう野菜を作っている」が最も多く50%「親戚、実家、知人等の農業の繁忙期に手伝う」が次に多く、合わせて全体の70%であった。「家が専業農家、兼業農家で作物を作っている」、「今までほとんど経験がない」は、20%未満だった(表4)。

次に、体験講座に何を期待して参加したかについては、「子供への教育、体験として魅力を感じた」が最も多く、「家族で参加できることに魅力を感じた」が次いで多かった。「休日のレジャーとして農業体験できることに魅力を感じた」とする意見もあった。一方、「作物の作り方、管理の仕方を知りたかった」、「ジャム、ジュース、おはぎ、お餅など

表5 体験講座に期待していたこと（複数回答可）

	男	女
作物の作り方, 管理の仕方を知りたかった	0	0
ジャム, ジュース, おはぎ, お餅などの加工に興味があった	0	2
休日のレジャーとして農業体験できることに魅力を感じた	2	2
子供への教育, 体験として, 魅力を感じた	4	6
家族で参加できることに魅力を感じた	2	6
講座の内容に魅力を感じた	1	1
その他	1	0
合計	10	17

表6 体験講座に期待したことの満足度

	男	女
十分叶えられた	1	4
ほぼ叶えられた	3	1
どちらともいえない	0	0
叶えられないことが多かった	0	1
不十分であった	0	0
合計	4	6

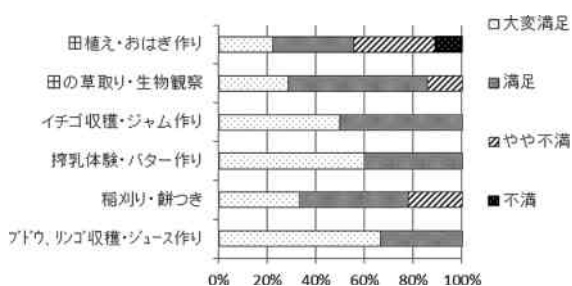


図1 講座各回の満足度

表7 田植え・おはぎ作りについての意見

- ・子供にはちょうど良いくらいの広さだった。
- ・田植えの面積が少なかった。せめて1枚
- ・娘は今までも田植え体験をしていたが、親が見る機会がなかったので丁度良かった。
- ・田植えを子供たちは経験したことがなかったので丁度良かった。
- ・田植えの時間が短かった。
- ・初めて田植えを経験できた。田んぼの中に入り感触を味わえた。
- ・おはぎもたくさんいただいた。
- ・おはぎ作りに時間がかかった。

の加工に興味があった」, 「講座の内容に魅力を感じた」は期待として少なかった(表5)。体験講座に期待したことが叶えられたかの設問に対して, 「十分叶えられた」, 「ほぼ叶えられた」と答えた人が参加者成人の方の90%であった(表6)。

各回の満足度については, 開催された6回ともに「大変満足」, 「満足」の回答が50%以上を占めた。7月13日のイチゴの収穫・ジャム作り, 8月4日の搾乳体験・バター作り・キャベツ収穫, 10月12日のブドウ, リンゴの収穫・ジュース作りは, 「大変満足」, 「満足」の回答で100%であった(図1)。

体験講座の各回の意見として, 田植え・おはぎ作りでは「初めて田植えを経験できた」「田植えを子供たちは経験したことがなかったので丁度良かった」など, 当講座では田植えを手植えで行ったため, 初めての体験であったとする意見があった。「田植えの面積が少なかった」「田植えの時間が短かった」など, 意欲をもってさらに経験を積みたいとする活発な意見もあった。「田んぼの中に入り感触を味わえた」という実践を肌で感じた意見や「娘は, 今までも田植え体験をしていたが, 親が見る機会がなかったのでよかった」など, 親子での参加のメリットに対する意見もあった(表7)。田の草取り, 生物観察では「初めは子供が虫を触るのを嫌がっていたが, 説明を聞き一生懸命子供が観察していたので

よかった」と意見があり, 子供が興味を持つことへのきっかけ作りを感じられる様子がかがえる意見もあった。「子供と一緒にいろんな生物を観察できた」という親子での経験をえた意見もあった(表8)。イチゴの収穫・ジャム作りについては, 「イチゴ獲りができ, そのイチゴでジャムをみんなで作る, おいしい時間でした」など, 収穫から加工までの一連の作業に対する満足があげられた(表9)。搾乳体験・バター作り・キャベツ収穫は, 野辺山ステーションで開催し, 参加者の意見では, 遠い場所を難点とするものもあったが, 「夏休みの行事として楽しく参加できた」, 「搾乳体験を野辺山の自然の中で体験できたのはよかった」など子供の夏休みの期間であることに合わせ, 家族での夏休み行事として取り組み, 自然豊かな環境と体験により満足したという意見があった(表10)。稲刈り・餅つきでは, 「稲刈りは, コンバインでやってしまうため, 貴重な体験でした。」と稲を手で刈ることに対して貴重な体験とした回答や「もっと稲を刈りたかった」など, 農作業をある程度の時間と作業量をさらに求める意見もあがった。さらに, 「できれば, 自分たちで植えた苗を刈ることができればよかった」という意見もあり, 講座において自分たちが手をかけた農作物の収穫までの継続した管理を求める希望もあがった(表11)。ブドウ・リンゴの収穫・ジュース作りで

表8 田の草取りについての意見

- ・生き物の説明を丁寧にしてもらえた。
- ・子供と一緒にいろんな生物を観察できた。
- ・初めは子供が虫に触るのを嫌がっていたが、説明を聞き、一生懸命子供が観察していたのでよかった。
- ・貴重なダルマガエルの生息が見られてよかった。
- ・親子で虫取り楽しかった。

表10 搾乳体験・バター作り・キャベツの収穫についての意見

- ・遠い場所でしたが、バター作りや子牛とのふれあいはよかった。
- ・場所が遠いのが難点でしたが、夏休みの行事として楽しく参加できました。
- ・キャベツの収穫が自分には新鮮でよかった。
- ・搾乳体験を野辺山の自然の中で体験できたのはよかった。
- ・内容が濃かった。(牛のこと、牛乳のこと、キャベツもよかった)

表12 ぶどう・りんごの収穫、ジュース作りについての意見

- ・ぶどうジュースを作ってワイン作りのような経験ができてよかった。
- ・りんごも何か加工したかった。
- ・果物の収穫体験をやったことがなかったのうれしかった。
- ・ぶどうとりんご獲りができてよかった。なかなか食べることができないヤマブドウを食べることができてよかった。
- ・ジュース作りの大変さがわかった。

は、「果物の収穫体験をやったことがなかったのうれしかった」「ジュース作りの大変さがわかった」など未経験の作業ができた達成感と「なかなか食べることができないヤマブドウを食べることができてよかった」など大学の特色を生かした講座に反応があった。「りんごも加工したかった」など更なる積極的な意見もあった(表12)。

体験講座の開催時期、回数、所要時間、参加費については、丁度良いという意見が多く、参加費用は安いとする意見が最も多かった(図2)。

体験講座の総合的な意見として、「家族と一緒にできる点、費用が少なくてすむところがありがたかった」とし、個々で携わる農業と違い、家族と一緒に作業ができることに満足が得られる点や「なかなかできない農業体験を、親も子も楽しむことができた」など身近にある農業の手伝いや家庭菜園には

表9 イチゴ収穫・イチゴジャム作りについての意見

- ・本格的にジャム作りを教われた。
- ・イチゴ獲りができ、そのイチゴでジャムをみんなで作る、おいしい時間でした。
- ・イチゴは少ししか収穫できなかったが、ジャム作りは、とても楽しく自分から作業に進んで参加していた。
- ・季節外れのイチゴが収穫できてとても楽しめた。
- ・ジャム作りは、子供が参加できずに残念だった。
- ・講師の方が丁寧に、ジャム作り中に持て余した子供たちに簡単な実験のようなことをさせてくれてよかった。

表11 稲刈り・餅つきについての意見

- ・稲刈りはコンバインでやってしまうため、貴重な体験でした。
- ・みんなでワイワイできてよかった。
- ・餅つきをみんなでやり、つきたてを味わえてよかった。
- ・私(親)も初めて稲刈りをしましたが楽しかった。そのあと食べたお餅とポン菓子が高かったです。
- ・もっと稲を刈りたかった。せめて1枚分。
- ・できれば、自分たちで植えた苗を刈ればもっとよかった。

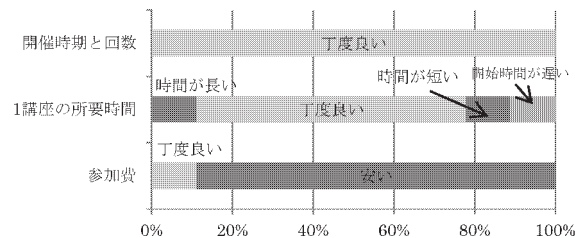


図2 開催時間、回数、時間、参加費に関する意見

ない講座のカリキュラムに満足した意見が得られた。また、農作業と加工を同日に行う点において、時間の配分の考慮を求める意見、「農業体験の時間をもっと多くとって欲しい」など、体験講座に子供とのフィールドでの農業体験、農作業の実践にウェイトをおいている意見もあがった。さらに、内容として動物に関する講座実施の希望、「野菜を作ったり、野菜を加工したりする講座があればもっと良かった」などカリキュラムに含まれていない作業を希望する意見もあった(表13)。

講座参加者の農業に求めるものについての調査では、「安心して食べられる農作物、食品の確保、食の安全」が最も多い意見であり、「子供たちに安全なものを選ばなくても生きていける社会になることを望む」、「安心して子供に食べさせられる食品が欲しい」など、現在の「食」に対する不安も含まれ、

表13 体験講座を通して印象に残ったこと、不満に思ったこと

- 
- ・家族で一緒にできる点、費用が少なくてすむところがありがたかった。
  - ・また次回があったら参加したい。
  - ・終了時間がまちまちで、予定時間をオーバーする回もあり、事前に知りたかった。
  - ・農作業体験の時間をもっと増やせば、生産の苦勞がわかりよかったかも。
  - ・全体的に楽しくできた。調理関係は、家族数が多いとやりにくかった。
  - ・なかなかできない農業体験を親も子も楽しむことができた半年間でした。
  - ・参加グループ数もちょうど良いと思います。
  - ・野菜を作ったり、野菜を加工したりする講座があれば、もっと良かった。
  - ・農業体験はとてもよかった。加工は子供たちがあまり参加できない時があり少し残念だった。
  - ・農作業の後に、食品加工は、無理が多い。農業体験の時間をもっと多くとってほしい。
- 

表14 体験講座参加者が農業に求めるもの

- 
- ・安心して食べられる作物、食品の確保、食の安全
  - ・地産地消
  - ・生産の現場、生産過程を消費者に知らせ、農が生活の基盤であることの教育
  - ・情報の開示
  - ・子供たちが、安全なものを選ばなくても生きていける社会を望む。
  - ・農作物の見た目だけでなく本来の味、栄養による価値の向上
- 

表15 体験講座参加者が農業の多面的機能の1つ「人間教育」について考えること

- 
- ・農作業による人と人の協力が生む効率や、知恵など実体験から得る能力向上
  - ・植物、動物の連鎖が農作物を作り出し、人間がそれを食すことからの生命の教育
  - ・生産に関わる労力、費用、時間を知り、農作物の大切さなどを感じる心の教育
  - ・子供たちへの食育は大事だが、その親達に対しても食育をする必要がある。
  - ・植物がどのように育っていくのか、また、それぞれの違いを探求する心を養う。
- 

未来の「食」に対する意見が多数であった(表14)。また、農業の持つ多面的機能の1つ「人間教育」については、「農作業から作業の効率を考える能力育成」や「協力が生む作業効率や知恵とそれを創出する力の育成」、「動植物の連鎖とそれを食することからの生命の教育」、「生産の労力、費用、時間などを知り、農作物の大切さを感じる心の育成」などがあげられた。食育に関しては、「子供たちへの食育は大事だが、その親に対しても食育をする必要がある」という意見が得られた(表15)。

## 考 察

### (1) 参加者の農業経験

講座に参加する家族の農業経験は、専業農家や兼業農家などの農業を生活の基盤としている人は、少ない傾向であった。しかし、参加者は農業との関わりを未経験とする人は少なく、農業の繁忙期の手伝いや家庭菜園などを手掛けている人が多く、講座に参加するにあたって参加者の過去、現在における農業への関わりが講座への参加の足掛かりになったとも考えられる。また、地域環境や学校教育により、

大人も子供も農業に触れる機会はあると考えられた。参加家族の小学生も授業の一環などで経験があり、親子での参加が得やすかったことも考えられた。

### (2) 講座に期待したこと、その充足度

参加者の多くが休日を利用して子供への教育、体験を目的とし、家族で作業を行うことに期待が大きかった。栽培技術を得ることや加工の知識向上といった習得できる技術的要素への期待、講座のプログラムの魅力よりも未体験や珍しい体験の農作業に対する期待と合わせて農業や農作業の体験から通して得られる総合的な教育、コミュニケーションの場として考え受講していたと考えられる。それらの期待は、当講座に参加することによって、概ね叶えられ、価値を得られたものと推察される。

### (3) 各回講座の満足度と意見

各回の講座内容の満足度も高く、生産に携わる農作業、フィールドで発見できる生物、結果が得られる収穫、食に直結する加工、生産物や加工物を食べて味わうなど、いずれの分野においても経験できてよかったとした意見が多く、内容の濃さにも評価が得られた。中には、講座での農作業、フィールドで

の活動の更なる充実、時間の拡張を希望する意見も多く、農作業が講座の中心であり、受講者は現在のカリキュラムの中においてさらに農作業、フィールド活動にウェイトをおいてほしい希望があることもわかった。また、大学の特色を生かした内容や周辺地域で行われている現在主流の機械利用や効率重視の農業とは異なる手間暇のかかる作業、作物に触れる機会の多いカリキュラムが、農業本来の人間にもたらす教育の中身を厚くするとも考えられた。

#### (4) 講座の開催時期、回数、時間、参加費

いずれも概ね丁度良いという意見が多く、約半年間にわたり家族で参加する形にとって利用しやすい回数、所要時間であったと考えられた。

#### (5) 参加者が農業に求めること

現在の農作物に対する不安などの背景から、安心できる農産物、食の安全に対する意識が強く、参加者の意見のうち最も関心が高い。参加者の多くが食の安心、安全を求める考えがあることから、体験講座は農業生産体験以外にも、農作物の生産から食に至るまでの過程を体験することにより、自身でよいものを選択する能力を培う場として活用できる可能性がある。

#### (6) 農業の多面的機能としての「人間教育」

参加者は、一連の農作業において、効率の良い行動、協力して生み出される作業能率向上などの行動能力向上や農作物生産において関わる生物生命と人間が作物を食することによる生命の教育、生産に携わることにより、苦労を知り大切さを知る心の教育などを農業がもつ「人間教育」としてあげている。これらの意見から参加者の意識の中にある農業に期待する「人間教育」が多岐にわたるものであり、体験講座を通して得られる要素として考えられていると推察された。

## 総合考察

以上のことから、農業体験講座は、体験を通して得られる効果として、農作業の仕方、栽培、加工の手法の会得に留まらず、農業の多面的機能の一つである人間教育、育成にも大きな期待がもてる。家族で参加して、農作業を子供と一緒に行うことで深いコミュニケーションが形成され、食育や知育、徳育の有用な現場となることが考えられる。参加者の大半が食の安心、安全に対し大きな関心を持つ中で、直接的な食の知識を増やす場とは別に、農作物の生産、加工から「食」にいたる過程を体験することによって、より「食」に対する深い知識と感覚が得られると期待される。したがって、農業体験講座は、参加者となる対象に応じた内容、規格を抽出、選択することにより、農業の多面的機能の人間教育が発揮され、昨今の農業に求められている食の安心・安全を得るためなどの食育を实践する1つのツールとして位置づけられることが可能であると考えられた。

## 謝 辞

講座の運営、実施、アンケートの実施にあたり、信州大学農学部附属施設系の小田切宏志氏、小松正巳氏、中村慶太氏、齊京正和氏にご尽力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 農林水産省 (2015) 平成24年度食料・農業・農村白書, 48p
- 2) 内閣府 (2011) 第2次食育推進基本計画, 31p
- 3) 中島羽菜子 (2008) 信州大学農学部における「土と緑の体験講座」に関する事例報告. 信州大学農学部卒業論文.

**The example report about the agriculture experience lecture  
'Tsuchi-to-midori-no-taikenkouza' in the agricultural department,  
Shinshu University**

**Takaaki AZUMA, Osamu SAITO, Astushi NAKAMURA, Satoru MARUYAMA,  
Ko HATAKENAKA, Mayuko OKABE, Koh-ichi HAMANO and Shigemitsu KASUGA**  
Education and Research Center of Alpine Field Science,  
Faculty of Agriculture, Shinshu University

**Summary**

The questionnaire was carried out in the family who participated in the agriculture experience lecture of the agricultural department, Shinshu University. While examining the contents of agricultural work from the viewpoint of food education, the possibility from the special feature which an experience lecture has to food education was examined. The participant had a hope for it being the education, experience, and the family to a child, and being able to participate, and participated in it. The family who participated was satisfied with practice of agricultural work, etc., and was taking the lecture. The experience lecture may be utilizable as a place which cultivates the capability to choose that as which self may be sufficient by experiencing the process from production of agricultural products to food besides agricultural output experience. In addition, in the human education by agricultural multiple functions, the comprehensive learn-by-doing teaching also including food education was also expected, and had participated. It was thought that a agriculture experience lecture could be positioned as a place which the many-sided education which these agriculture has practices.

**Key word :** 'Tsuchi-to-midori-no-taikenkouza', questionnaire, agriculture experience lecture,  
Food safety, Human education